

差別された数だけ差別した数があるはずなのに

「ねずみ」「ねずみ」「ねずみ」

よしおたち三人の男子は、せつ子の顔を見てはやし立てる。そんなことが何回か続いた。おとなしいせつ子はすごくいやだったが、じつとがまんしていた。

しかし、ついにせつ子は自分の気持ちを行動に表した。習字の時間、書き初めの練習をしているときだった。またよしおが「ねずみ」と小声で言ったのだ。すると、せつ子はまるで糸が切れたようになって、よしおにおそいかかった。あまりに突然、よしおをなぐったり、けったりしているせつ子の様子に、周りの子どもたちも驚いていた。けんかでは負け知らずのよしおだったが、せつ子に反撃されて初めて『やばい。やりすぎた。やられるしかない。』と思い、なぐられるままに手を出さなかった。

その後、せつ子は、先生に泣きながらこつこつたえた。

「私に悪いところがあるなら、そう言ってほしい。直しようもないことで言われるのはいやだ。それに騒ぎになったとき、周りでニヤニヤしている人がいた。それも私にはとてもつらかった。」

次の日の授業では、クラスみんなで今回の事件を考えた。初めに、これまで悪口を言われたり、無視されたり、仲間はずれにされたりした子が何人か自分の経験を語った。次に、先生はその子たちの思いをとりあげながら、

「差別された数だけ差別した数があるはずなのに、なぜ差別されたと感じる人の方が多いのだろう。」と問いかけた。そして、つらかったせつ子の思いをみんなで考えてほしいと言った。

たえ子とゆき子は一学期、せつ子に対して、「うざい」などのひどい内容の手紙を書いたことを思い出していた。授業後、二人は次のような感想を書いた。

私は、前にせつ子にひどい手紙を渡してしまいました。その時、「チョームカック」と思っていたから、何も思わなかったけど、今日勉強して、「あーなんで、あのとき、せつ子にあんなひどい手紙を書いたんだろう。」と反省しています。もし、自分が書かれたらいやなのに、その子の気持ちを考えていなかったから、本当に悪かったと思います。

私は二年、四年、五年でつらいことがたくさんありました。その中でも一番つらかったのは五年生のころです。仲間はずれにされました。すごくつらかったけど、周りに言える友だちもいませんでした。でも、前に自分が仲間はずれにしてしまった友だちがいました。私はその子から「どうしたん」と声をかけられました。すごくうれしかったけど、なんでそんなに私にやさしくできるのかなあと思っていました。その子は一人の間はずーっと一緒にいてくれました。私は少しがうかもしれないけど、せつ子の気持ちがわかります。(たえ子)

私は、せつ子にひどいことを手紙で書いてしまったことがあって、その後、たのみごとをして、今さら何のつもりや」とふだん言わないような返事が返ってきて、それだけせつ子に対して傷つくことをしたんだなあと反省したけど、やっぱり話しかけにくかった。私はせつ子以外にも、やっぱり人を傷つけたことがたくさんあると思う。機会があったら、せつ子と仲直りしたい。(ゆき子)

一方、せつ子は、数日後、次のような文章をノートに書いてきた。

私は、はつきり言って、あの授業を聞いているとき、あの場から逃げたい、消えたい、という気持ちでいっぱいだった。なぜか、あの場に居るのがこわくてこわくてたまらなかった。

でも、あの授業で差別された経験を発言していた人は、「こつこつことをされたらこの人はいやなんだなあ」と言うことが分かったから、私はこれから気をつけようと思った。あの授業の後から、三人も全然「ねずみ」と言わなくなってきたからうれしい。それにあの三人のことはきらいじゃなかったし(相手はどう思っているかは別として)、今ではあの三人に話しかけるのはこわくない(前には話しかけたら、また言われるんじゃないかと思ってこわかったけど)、おとぎ話でいつとめでたしめでたしと言った感じの毎日。

私がつらかったあの時に助けてくれ、守ってくれたみなさんにいつか恩返しができるといいのですが。(せつ子)

差別された数だけ差別した数があるはずなのに

(小学校高学年)

A 教材設定の理由

「差別された数だけ差別した数があるはずなのに」という言葉は、差別された側がづらい思いを出せない学級の状況を表しているとともに、差別する側や傍観者がいかに差別された側のつらさを想像できていないかという状況も表している。そうした学級では、差別された側も差別する側も常に不安を持ちながら過ごしている。

差別された側は、そのつらさをいろんな形で表す。ときにはそれをせつ子のように暴力で表すこともある。暴力は決して肯定されるべきではないが、単に善悪で判断したり、いじめた方も悪いが、暴力もいけないというようなけんか両成敗的な対応で終わってはならない。教員は差別された側に立ち、事の本質は差別の問題であるということを丁寧に指摘したい。そして、暴力という手段でしか自分の思いを表現できなかったせつ子のつらさに周りの子を共感させたい。

それができたとき、差別した側も傍観者もこれまでの自分自身の有り様をふり返り始める。そして、差別する側が真摯に自分をふり返る時、自分自身のつらさ、弱さや不安もありのままに差し出す。

そうすることによって、だれもが安心して過ごせる学級ができていく。

現象面だけが見えなくなったから、差別がなくなったのではない。差別する側と差別される側の思いがつながってこそ、差別がなくなったといえる。この教材を通して差別した側と差別された側がつながっていくきっかけとしてほしい。

B 教材の解説

本教材は県内の6年生の学級のとりくみを元にして構成した。

この学級には、不登校の子や保健室にいて教室に入れない子、家庭に居場所がない子など、様々な課題を抱えた子どもたちがいた。担任はそうした子どもたちと必死に関わり、問題を子どもたちに投げかけ、子どもたちと一緒に話し合った。その中で子どもたちはどんどん自分を出すようになっていった。

だが、一人ひとりを見ると、まだ心の中に様々な課題や悩みが見え隠れしていた。そこで、差別の構造を知り、自分を見つめたり、周りの人に目を向けられるようになってほしいと、部落問題学習にとりくんだ。特に水平社宣言の学習を通じて、子どもたちはつらさやしんどさを乗り越えてきた部落の人たちの中にある「人の強さや優しさ」を強く感じていた。そして、自分や自分と関わり合う全ての人が「温かい心」であってほしいと願うようになってきた。

そんな中、数人の子どもたちが自分の受けた差別について書いてきた。その中にせつ子がいた。せつ子は「『仲間はずれ・無視・悪口』が今の差別。『うざい』と手紙に書かれた」と書いていた。

せつ子はいつもにこにこしてとても穏やかな子である。そんなせつ子が、1学期に

ゆき子とたえ子からひどい内容の手紙を受け取っていた。手紙を出した2人に話を聞くと、「せつ子が2人の触れてほしくない部分に触れてきたから、手紙を渡した。決してあやまるつもりはない。」と言う。せつ子はせつ子で「ひどい手紙を書かれたのは私なのに、どうして仲よくしなければならないのか」と互いの思いはすれ違うばかりで時間は過ぎていった。

水平社宣言の授業が終わって数日後、教材文冒頭の事件は起こった。部落問題学習の授業で差別された人の気持ちを考えたことにより、以前から友だち関係で悩み、気持ちを閉ざしていたせつ子は「我慢ばかりしたくない」「自分の思いをみんなに伝えたい」と強く思ったのではないだろうか。そうとらえれば、せつ子のとった行動は「差別に対する抵抗」であり、みんなとつながりたいという気持ちの表れである。そして、そんなせつ子の思いに気付いたから、よしおはなぐられるままに手を出さなかったのだろう。

授業の中で、担任は身近な差別を「悪口、無視、仲間はずれ」と定義する。それによって、学級の子どもたちは自分たちがしてきたことを差別の構造の中で捉え直していく。さらに、担任の「差別されただけ差別した数があるはずなのに、なぜ差別されたと感じる人の方が多いのだろう」との問いに、傍観者も含め差別している側の自分をふり振り返り始める。

たえ子は、自分のしたことをふり振り返りながら、自分が仲間外れにされたときのことをふり返る。いじめていたたえ子自身もつらさを抱えていたのだ。それがせつ子への共感となっていく。

ゆき子は自分のしたことを反省しせつ子と仲直りしたいと思いつつも、話しかけられずに悶々としていた。そうしたもやもやをこの授業を通して整理していった。

せつ子は、授業の初めは、その場にいるのがこわくてたまらないほど不安だった。しかし、友だちが自分の思いを受け止めてくれたり、つらかったのは自分だけではないと思えてくると、そうした不安はなくなっていく。そして、「ねずみ」とはやし立てた3人に話しかけるのもこわくなくなった。

担任は「せつ子に謝りたい」という2人の想いをどうせつ子に伝えていけばよいのか分からずに2学期を終えてしまったと書いているが、是非、それぞれの学級では、差別された側の思いと差別した側の思いを丁寧につなげていってほしい。

C 教材の使用にあたって

- ① 差別された側の思いを全体に出すときには、本人とその意義を確認し、じっくり話し合い、納得してから行う。
- ② 差別された側の思いを全体に出しても、共感を得られなければ被差別の側はますますつらくなってしまふ。なかまづくりと並行しながら、全体に出せる時期を十分考えて進めてほしい。

D 参考資料

第52回全国人権・同和教育研究大会報告

「子どもたちのつながりを見つめて」

E 授業の展開例

授業の展開と基本発問	学習内容と支援
<p>1 導入 みなさんは、友だちから悪口を言われたり、無視されたり、仲間はずれにされたりしたことはありませんか。また逆に無視したり、仲間はずれにしたりしたことはありませんか。</p> <p>2 展開 「差別された数だけ差別した数があるはずなのに。」を読みましょう。</p> <p>よしおをなぐったり、けったりしているせつ子の気持ちを考えましょう。</p> <p>よしおはなぜなぐられるままになっていたのでしょうか。</p> <p>「差別された数だけ差別した数があるはずなのに、なぜ差別されたと感じる人が多いのだろう。」という先生の問いに対する答えをみんなで考えてみましょう。</p> <p>たえ子、ゆき子、せつ子の3人の授業後の感想を読んで、みなさんはどう思いましたか。</p> <p>3 まとめ みなさんも、差別したとき、差別されたとき、差別を見過ごしたときの様子や思いを書いてみましょう。</p>	<p>挙手させて、数を数え、差別された側が多いことをおさえておく。</p> <p>指導者が読み聞かせた後、黙読させる。</p> <p>はやしたてられていやな思いをしているだけでなく、直しようもないことで責められたこと、周りの傍観者に対する怒りなどのせつ子の思いを出すことで、単なる悪口ではなく、せつ子に対する差別の問題であることに気付かせる。</p> <p>日頃はおとなしいせつ子が、それほどまで激しい行動にでたことで、逆にせつ子のつらさがわかり、自分のしたことをふり返ったからであることを押さえながら、暴力を単に善悪の問題にしないようにする。</p> <p>差別した側が差別された側の痛みをわかっていない状況が学級にあることをおさえる。</p> <p>差別したたえ子もつらい思いを抱えていて、それがせつ子への共感につながったこと、ゆき子もまたせつ子と仲直りしたいと思いながらも、それができずに悶々としていたこと、せつ子がこの授業のときは教室にいるのがつらかったけど、共感し、守ってくれる仲間がいることがわかって、教室が安心できる場になったことをおさえ、差別された側、差別した側の思いをつなくことの大切さに気付かせたい。</p> <p>すぐに授業でとりあげるのではなく、特につらい思いをしている子とは十分話し合った後、授業でとりあげ、その後のとりくみにつなげたい。</p>